災害と想像力

――「鯰絵」の向う側で――

森下　みさ子

マグニチュード6・3と推定される直下型の大地震が、人口の密集する都心部を襲った。といっても、先頃の神戸の大地震でもなければ、関東大震災でもない。頃は江戸時代も末期の安政二年（一八五五）十月二日の夜も更けた十時すぎ、江戸市中でのことである。ガス漏れによる爆発や高層建築物の倒壊こそなかったものの、木造の家屋は軒並み崩れ落ち、火の手もあがって、都市生活者に多大な被害をもたらしたことは確かである。けれど、ここでは当時の被害の状況や復興の様子を伝えるのが目的ではない。むしろ降って湧いたような災害によってはじめて浮かび上がってきた、江戸に住む人々の図太く軽妙な想像力の産物を披露することにある。それらを今日総して「鯰絵」という。文字通り地震の原因と考えられていた鯰を様々にデフォルメした、多くは一枚刷

りの絵のことである。

たとえば、雷神であり水神でもある鹿島神やエビス神に、巨大な石（これを要石という）や瓢箪によって押さえ付けられている大鯰の図。横には「地震御守」の字が付されているものもある。あきらかに大災害が二度と起こらないように、地震の源である鯰を神様たちに押えていてほしいとの願いが込められている。かと思うと、「鯰大火場焼」などと付けられた一枚は主旨は同じだが、題から見て取れるようにいささかこっけい。エビス神が包丁を振って俎上の鯰を料理すると、傍らでかば焼きにして食べさせてくれるという代物である。

これらは皆大なり小なりに、あのヌメヌメした黒光りする生き物の胴体をさらしているのだが、こういう絵よりも目につくのは、鯰を大胆に擬人化して描いた「鯰男」の姿である。波模様の着物の裾もはだけて、人々に打ちたたかれている鯰男もいれば、瓢箪模様の揃いの着物で徒党を組み雷神・風神に煽られながら、鹿島神に守られた町人たちと合戦を交えている鯰一派もいる。そのいっぽうでは、エビス棟梁のもと粋な大工のいでたちで太平の「平」の字を建てている鯰たち、地震に効く薬を商う薬売りや、七つ道具を背負った弁慶に身をやつす鯰男までいて、どうにもこうにも憎みきれない愛嬌ぶりである。

いったい彼らは何者なのだろう。地震を起こすだけの単なる悪党ではなさそうだ。あまたの「鯰絵」を収集して研究を積んだオランダの文化人類学者アウエハントは、その大部な著書（『鯰絵』せりか書房）において、「鯰絵の表象世界では、その主要な表現が両義的構造と密接に関連して特徴づけられており、それは民族宗教に根をもつ観念と結合し、地震が起きるとある特殊な形で復活する」と述べている。すなわち、鯰男が果たす役割は、破壊者でありながら建設者、人と対立しつ

つ調和をはかり、しかもそれが人々の笑いを誘うほど道化的であることにおいて、社会・文化の攪乱者であり創造者でもあるトリックスターだというのである。いいかえれば、地震という人為を超えた災害が人々の想像力にもたらしたものは、善悪の判断を超えたところにある力の作用、まさしく社会の「地殻変動」という実感である。アウエハントは、引用したように鯰絵の奥にうごめいている民俗宗教のダイナミズムに向けて筆を進めているが、ここでは民俗への深入りは避けよう。それよりなにより、この時勢ならではの鯰たちの活躍ぶりが心憎い。

もう少し絵のバリエーションを加えると、鯨の塩吹きのように金貨を吹き上げている大鯰、金貸しの口から金貨を吐き出させて皆にばらまいている「世直し鯰」、さらには要石にとらえられた篭の鳥の遊女鯰に差し入れする鯰女。鯰たちが演じる奇抜なポーズの背景には、江戸に生きる人々の心情が透けている。地震よりわずか二年前にペリー来航が伝えられ、黒船の脅威が人々をパニックに陥れている。いっぽうで、貨幣経済の浸透は貧富の差を動かしがたいものにしていた。その典型は、お金のために囲われて身をひさぐしかない遊女たちの哀れな姿に現れている。不安と不満と不穏と不当、江戸末期の社会はもうすでに揺れはじめており、いっそのこと大揺れに揺れて壊れて、いっさいがっさい造りなおしてほしいほど「革命的」な気運が鬱積していたともいえる。そこにやってきたのが巨大鯰、すべてを御破算にする大地震だったのである。もちろん、人々はひとしなみに害を被り、その後で世の中を造り変えるほどの算段があったわけではない。自分の身を守り、食べるもの住むところを確保するのに精一杯だったことだろう。それでもなお、こうした絵が何枚も何枚も刷られ売られ買われて、災害直後の人々の手にわたり目に供し、おそらくは願いと笑

いをもって迎え入れられたにちがいない。それは、なんともおおどかでしたたかな力である。その力を沸き立たせ奮い起こさせる想像力の根っこが、江戸の地層の深部を貫いていたということだろうか。

さて、すっかり江戸の民衆になじんでしまった鯰たちは、絵の中で「地震けん（今でいうジャンケンの一種）」をし、髭の引っ張り合いをし、はやり唄を口ずさみ、浮かれ踊って遊んでいる。中には、親子で仲睦まじく餅をつまんでいる鯰一家の絵もある。その頭上には、地震の際起こりやすい事故のあれこれが餅や団子の品書きになって並んでいる。だらりの帯も愛らしく、手鞠つきつつ「地震鞠唄」を唱える鯰娘まで登場している。こうして「擬人化を介して人間的なレヴェル――いわば身近で親しみあるやり方」（アウエハント）で地震という大災害がとらえられるとき、遊びと笑いによる災害から改革への「変換」という人間の処し方に、子どもの遊びにも通じていくような、なにか柔軟で強靱な生のありようを感じるのは、ひとり私だけだろうか。

（聖学院大学）

▲『鹿島神鯰おさえの図』（No.2273）
（『鯰絵』せりか書房より）